

平成25年度 公益財団法人しまね文化振興財団

管理運営事業報告について

1. 取組概要

しまね文化振興財団は、中期的な活動方針として策定した「しまね文化力構想」のもと、文化の香りに包まれた魅力ある島根の実現を目指し、多様な文化活動を展開しました。

公益財団法人として初の通期経営を行い、市民から信頼される自律した公益経営の確立を目指し、経営の質の向上に努めました。

第2期指定管理期間を通じた基本方針として、『点から面へ「しまね文化力」創造のセンターとなる』を掲げており、中期経営計画策定や「しまね文化力構想」改訂に向けた取り組みのなかで、県域文化振興を担う中核組織である文化振興財団の役割を再確認するとともに、県公立文化施設協議会やミュージアム協議会などを通じてネットワークの強化に向けた事業見直しを積極的に行い、「地域文化プラットフォーム戦略」の具体化に努めました。

また、指定管理業務として指定を受けた「島根県民会館」「島根県芸術文化センター」「八雲立つ風土記の丘」の文化施設を中心に、財団の専門性を発揮し、施設の管理運営にとどまらない財団ならではの県域への文化振興の展開を行いました。

2. 事業推進実績

- (1) 公益財団法人として、自律と貢献の公益経営の確立を目指し、中長期的な展望を持ったシステム等の導入を進め、「財団文化芸術アドバイザー」の活用による中長期の計画づくりなどに取り組みました。
- (2) 全県的な文化活動推進のため、「島根県文化芸術振興条例」に沿う県の文化政策に連動する形で、学校への芸術家派遣事業や県民が活用できるチケットシステムの導入、施設間・公立文化施設間の連携を強化する事業取り組みなど、大学や文化芸術活動を行う県民、公立文化施設間の連携が活発になるような環境整備に取り組みました。
- (3) 島根県全域の伝統文化の把握に向け、神々の国しまねプロジェクトでも文化・観光資源として注目された「神楽」の次世代への伝承の実態を把握するべくデータベース構築事業を行いました。
- (4) 指定管理者として、SNS の活用など、効率的な管理運営や利用者の立場に立ったサービスの提供は勿論、財団が指定を受けている意義を踏まえ、次世代育成や社会的包摂に配慮した多様なアウトリーチ、人材育成事業を行うなど、総合的な県民サービスに努めました。
- (5) PDCA による業務の改善を通して得たノウハウを、次期指定管理運営に活かせるよ

う整理し、新たな提案の具体化や事業計画の策定の準備を進めました。

- (6) 公益法人会計への理解を深め、四半期決算の定着と厳格な予算管理に向けた会計システムの更新、職員研修体系の整備・充実、職員と役員との個別面談の実施等により、組織強化とともに職員のモチベーションを高める組織経営に取り組みました。
- (7) 経営の質の向上を目指し、グループウェア・会計システム・パソコンの入替えなどの業務効率を高めるための投資を積極的に行うとともに、職員の健康管理に注意を促し、時間外の縮減に努めることで大幅な削減を実現しました。

3. 具体的に実施した事業

(1) 公益目的事業

- ① 地域文化支援事業 県民参加ミュージカル「あいと地球と競売人」
初演から20周年を迎える県民参加ミュージカルとして島根県民会館の公演に加え、「隠岐世界ジオパーク登録記念」として隠岐の島町総合体育館で開催しました。
- ② 地域文化支援事業 しまね地域文化コーディネーター人材育成事業
文化活動を地域に根づかせコーディネートを担う人材育成を目的に、学校などへのアウトリーチを中心とした研修会を開催しました。
- ③ 地域文化支援事業 情報誌「キャッチ」発行事業として
情報誌「キャッチ」やウェブサイト「キャッチナビ」を通して、県内全域の文化施設情報を提供・発信しました。
- ④ 公益信託「しまね文化ファンド」事務局運営事業
県民の文化芸術活動への助成支援を行う「文化ファンド」事務局として、単なる受付事務に終わることなく、他の助成事業の斡旋やアドバイスをを行い、総合的な文化支援窓口として中間支援的な取り組みを行いました。
- ⑤ 写真文化事業
県教育委員会から委託を受け、写真展「歴史探訪—しまねの史跡—」を島根県立美術館(松江市)・石央文化ホール(浜田市)にて開催するとともに、並河万里写真・フィルムの保存整理などを行いました。

○写真展「歴史探訪—しまねの史跡—」

平成26年3月5日～10日 島根県立美術館ギャラリー(松江市)

平成26年3月19日～24日 石央文化ホール(浜田市)

- ⑥ 神話のふるさと島根子ども神楽情報発信事業
県教育委員会から委託を受けて、県内の子ども神楽を中心にした210団体の情報を収集しデータベース化に取り組みました。
- ⑦ 次世代の文化芸術体験推進事業
文化庁「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」の委託を受けて、県教育委員会

と連携し、小・中・高等学校、養護学校などの離島・中山間地域を含む43校3,548名に文化芸術体験の機会を提供しました。

また、島根県民会館を中心に島根大学教育学部と連携する「N響メンバーによるアウトリーチ」などを通じて、アウトリーチの質を高める取り組みも進めました。 гранトワでは、文化庁「劇場・音楽堂等活性化事業」などを活用し「県域アウトリーチ事業」を積極的に展開しました。

⑧ 指定管理施設の管理運営(公益目的事業)

文化振興を進めるための拠点文化施設として、「島根県民会館」「島根県芸術文化センター」「八雲立つ風土記の丘」の指定管理施設の管理運営を行いました。

(2) 収益事業

① 「島根県民会館」有料駐車場運営事業

県民会館施設利用者、来館者のための施設利用サービスとして、有料駐車場運営事業を行いました。

② 「島根県民会館」収益事業

文化振興目的以外に施設利用を行う利用者に対し、会議や研修等の様々な目的で利用される施設貸与事業を行いました。

③ 「島根県芸術文化センター」収益事業

文化振興目的以外に施設利用を行う利用者に対し、会議や研修等の様々な目的で利用される施設貸与事業を行いました。

④ 「少年自然の家」施設管理運営事業

入所者の安全安心に配慮した管理運営を確実に行うとともに、長年の運営ノウハウを基に、県教育委員会と連携して研修事業にも協力を行いました。

7月には給食に異物が混入する事件がありましたが、食材の仕入れ・確認をきめ細かく行い、再発防止に努めています。

⑤ 島根県立美術館ミュージアムショップ運営事業

展覧会図録や関連グッズの販売を行うことでの収益を生み出すとともに、来館者のニーズをくみ取り、島根らしいオリジナルグッズを提供するためサポーター制度を設けるなど、収益構造の確立に進めました。

4. その他

職員研修体系の整備・充実

社外研修として実施している「公社等協議会研修」「山陰経済研究所セミナー」「自治研究所研修」の体系的な位置づけを持たせるとともに、朝礼等を活用した社内研修を充実することで学びの循環を作る取り組みを展開しました。

島根県民会館

■平成25年度 指定管理業務総括～

第2期指定管理の4年目として

私たちは平成24年10月より公益財団法人として新たにしまね文化振興財団としてスタートした。

島根県民会館の平成22年から平成26年までの指定管理業務の基本方針として『点から面へ「しまね文化力」創造センターとなる』を掲げ、「拠点文化事業」に加えて「県域展開事業」、「街づくり社会化事業」などの施設内にとどまらない取り組みを行ってきた。

そして、指定管理期間の途中であるが、行政と連携した政策を実現する役割を理解し、提案書の内容の見直しを行い「島根県民会館 県域中核施設化方針」のなかで、「やおよろずの地域文化による次世代・地域の活性化プロジェクト」を立ち上げ、実施してきた。

□やおよろずプロジェクト

■重点プロジェクト1 地域文化振興人材育成事業

島根県の文化振興の基盤整備はソフト・人材育成であり、人づくりに他なりません。

地域それぞれの文化を活かしつつ、県民の自発的な取り組みの活性化を目指す。

* 地域文化コーディネーター人材育成事業

■重点プロジェクト2 島根に根ざす文化創造事業

伝統芸能の発掘・創造発信を積極的に推進すると共に、県民が参画する創造事業や地域の魅力を再発見し発信する取り組みを行う。

* 伝統芸能創造発信事業／ミュージカルによる地域文化力の発信

■重点プロジェクト3 連携・協働による地域の文化を支える仕組みづくり事業

島根県民会館が直接事業を実施する取り組みだけでなく、広く県民・教育機関・団体と協働し連携し相互の資源を活かした地域の文化を支える仕組みづくりを進める。

* 島根大学教育学部連携事業／地域文化コーディネーター人材育成事業(再掲)

■重点プロジェクト4 場の活用推進事業

県域中核施設である島根県民会館そのものを県民の文化活動活発化の場所として活かすとともに、各地域の中小規模館など既存施設の有効活用を進めて展開を図る。

* 島根県民会館 拠点文化事業・県地域文化力発信

① 文化事業

第2期指定管理の基本テーマ「しまね文化力の発信」のもと、拠点文化事業・県域展開事業・街づくり社会化事業・情報コミュニケーション事業と4つの体系を立て、「しまね文化力としてのミュージカルの発信」を今年度の重点テーマとし事業展開した。

初演から20年経過して県民に広く浸透しているミュージカル「あいと地球と競売人」は、初めて隠岐公演を実施し、地元小学生の出演や地元スタッフの活用などを通し、地域の舞台芸術水準の向上を図った。松江公演では、企業協賛による中山間地の小学生招待や、特別支援学級の子どもや共同作業所員にリハーサルを公開するなど、様々な要因で鑑賞が難しい方への鑑賞機会提供に積極的に取り組んだ。

② 貸館事業

貸館事業の数値目標である大ホール・中ホールの稼働率は、24年度に引き続き両ホールとも目標を達成した。

管理運営の数値目標である大・中ホールの利用者数も 184,431 人と目標を達成した。

利用料金収入も、昨年と同様に目標を14%越えることが出来た。

各出入り口に電子カウンターを設置して来館者数を把握した結果、35万人としていた目標を大きく上回る63万人であった。

また、昨年と同様に共催事業への誘導による鑑賞事業の掘り起こしや、島根大学教育学部を初めとする教育連携、利用者開発と館の広報も兼ねた「バックステージツアー」を開催するなど、将来の利用者創造につながる事業を展開し、利用促進へつなげることができた。

③ 舞台業務

ホール等の管理運営だけでなく県域の舞台技術向上を図るため、舞台技術研修会や高校演劇講習会、舞台スタッフ研修会を実施するほか、バックステージツアーや施設見学を通して、県民へ舞台技術の普及を図った。

今年度のテーマ「しまね文化力としてのミュージカルの発信」を目標に「あいと地球と競売人」に関わる舞台技術業務を遂行し、松江公演では舞台スタッフ研修会と地域技術スタッフで連携して公演をおこなった。

また、隠岐公演では、離島及び体育館での開催と特殊条件にも関わらず、地域の文化施設で活躍されている舞台技術ボランティア(隠岐島文化会館オペレータークラブ KUROKO)との連携により公演を成功に導くことが出来た。

今後も、県民の文化を支える舞台専門技術者を配置している文化施設の一つとして、県民文化活動の支援を続けていきたい。

④ 利用者サービス

公の施設にふさわしい公益性を確保するため、アンケート調査、利用者懇談会を実施したほか、窓口対応における様々なお客様のご意見・要望を集約し、安全安心で快適な施設利用につながるよう努めた。

グループウェアを活用し職員間で情報共有し、トラブルが起きないための予防措置を行った。島根県民会館は施設の構造上バリアフリー化が難しい中、障がい者はもとより、来館者全員に少しでも優しい施設を目指し、楽屋口へのスロープや大ホール客席から舞台に上がる階段に手摺りを設置したほか、バリアフリー接客研修を実施し、障がいのある方への対応力を高めた。

⑤ 施設管理運営

老朽化が進む施設をトラブル無く運営管理するには、定期点検はもとより普段の点検と、素早い対応が必要である。

たとえトラブルが発生しても、素早い対応で、指定管理者として速やかにトラブルを解決し、利用者にご迷惑がかかる前に解決するよう努力した。

県と共に策定した中長期改修計画については、今後この計画を共有して、トラブルの未然防止、長寿命化に取り組みたい。

危機管理では、消防署・警察署との連携で山陰初の「避難訓練コンサート」を実施し、危機管理マニュアルの検証を行うと共に、県内外公立文化施設職員、一般参加者、行政等の参加者の防災意識向上を図った。

島根県芸術文化センター「グラントワ」

■平成25年度指定管理業務総括～

① 第2期指定管理の4年目として

島根県芸術文化センター「グラントワ」は、美術館(県立石見美術館)と、劇場(県立いわみ芸術劇場)が併設する全国でも数少ない複合施設である。その指定管理を託された私たちしまね文化振興財団は運営基本方針を「点から面へ 石見地域の文化力創造の拠点を目指して」をテーマに掲げ、複合施設ならではの様々な事業に取り組んだ。

国の「劇場・音楽堂等の活性化に関する法律」ならびに県文化芸術振興条例に沿って、このセンターの特徴を生かした「拠点文化事業＝鑑賞、育成、創造」、「情報コミュニケーション事業→美術館利用促進」を展開。センター内の事業にとどまらず、「街づくり社会化事業」や石見全域に出向いて実施する「県域展開事業」など、積極的な文化・芸術活動を幅広く実施した。

② 美術館と劇場が一体となって開催した特別展「森英恵」とオペラ「夕鶴」

平成26年2月11日、グラントワ大ホールで日本オペラの不朽の名作「夕鶴」が、佐藤しのぶ主演、演出:市川右近、美術:千住 博、そして衣裳が森 英恵氏という豪華布陣(ドリームチーム)で上演した。

石見美術館は森英恵氏が新たに寄贈した作品などを展示する特別展「森英恵」を実施した。いわみ芸術劇場でもこの機をとらえて森英恵氏衣裳デザインのオペラ「夕鶴」を公演しました。県と財団が密接に連携し、オペラの入場券で特別展「森英恵」が鑑賞できるように配慮した。

来場者は森英恵氏の作品が美術館と劇場で一時的に見ることができた。まさに複合施設ならではの特長を最大限に発揮することができた。また、オペラには育成事業で誕生したフランチャイズ団体のグラントワ・ユース・コールの10人の子どもたちも出演した。プリマドンナ・佐藤しのぶ氏と共演するなど、子どもたちにとって、生涯忘れることができない思い出を紡ぐことができた。

森英恵氏と澄川喜一センター長は共に吉賀町の出身です。オペラ開催に先立つ10日には、古里が誇る2大芸術家のトークショーも開かれるなどムードが盛り上がった。

【東京での制作発表】



左から 千住 博氏、佐藤しのぶ氏
森 英恵氏、澄川喜一センター長

【グラントワでの公演】



ユース・コールの子どもたちも熱演

① 文化事業

7つの事業方針に基づく4つの事業体系により、「多様で質の高い芸術文化」の鑑賞機会と新しい芸術文化の芽を育む機会を提供するとともに、地域と連携し様々な芸術文化事業を展開した。

また、文化庁の「劇場・音楽堂等活性化事業(旧・優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業)」と「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」(平成22年度から5年間の継続支援)を軸に県域展開事業を推進し、石見地域での人材育成を行った。

② 貸館事業

指定管理の基本テーマである「利用者と同じ立場に立つ」のもと、貸施設の提供だけではなく、利用者が求める利用目的の達成度をより高めるために支援した。また、利用率の向上と利用開発に取り組んだ。

利用は昨年度実績に対しスタジオ、ギャラリーが若干下回ったものの、大ホール、小ホールの練習利用が増加したことは、住民の文化芸術活動が一層活発化してきたことが伺える。また、吹奏楽、合唱のコンクール開催に合わせた利用が多かった。

小ホール利用は幼稚園・保育園の5割減免導入3年目であり、制度が浸透したことで微増、維持されている。また劇場の育成事業や創造事業での積極的な活用のほか各種式典の利用により利用率が上昇した。

③ 舞台業務

指定管理の基本テーマである「地域文化を舞台技術でサポートする」のもと、舞台技術の提供だけでなく、舞台技術をもって地域の文化芸術活動を支援し、文化振興に努めた。

観客、利用者の安全を最優先に考える意識を高め、円滑なホール運営に努めた結果、人身、物損等の事故は発生しなかった。

④ 広報・利用促進業務

定期広報ツールを的確に運用し、情報提供関連施設 3,000 施設に年 4 回滞りなく発送した。ホール友の会員数 2,300 人に毎月、美術館ミュージアムパスポート 2,000 人に企画展前 4 回、滞りなく発送した。

最新情報の提供手段として長らくメルマガを運用してきたが、情報ニーズの変化に伴い、来年度から SNS (フェイスブック) に切り替えることとし準備を始めた。

再来年の平成 27 年度が開館 10 周年にあたるため、来年度から機運向上を図るために準備会が設けられることになった。合わせて、定期広報ツールやホームページのリニューアルを検討していきたい。

4 企画展中、3 回が目標達成した。特に「宮芳平」展は目標が少ないながら冬季の開催であったが、美術館開館 9 年が経過し、内容の「森鴎外」が地域に馴染まれてきたのではないかとと思われる。

協賛に企業を取入れ、企画展または企画展関連イベントと企業のイメージをコラボレーションして企画展周知を工夫した。(グラントワ大茶会や和のイメージ→三松堂、着物女性の美しさ→資生堂)

企画展を独創的なイメージの販促ツールや仕掛けで魅力・関心を向上させた。

⑤ 利用者サービス

指定管理の基本テーマである「多様な利用者に訴求できるサービス体制の充実」のもと、利用者からの苦情等を分析し、対応できることは速やかに対応し、重要案件については県と協議しながらハード面、ソフト面の充実、サービス向上に努めた。

業務 PDCA サイクルを稼働させるために、4 課員で構成する業務品質管理委員会で利用者アンケートや職員改善提案の懸案事項を迅速に対応し、改善に努めた。

⑥ 施設管理運営

経年劣化、使用劣化による突発的な故障が発生するようになったが、メーカーまたは保守点検業者と迅速な連絡を取り、貸施設利用や自主事業で運営に大きな支障を来す事象は発生しなかった。

専門業者による保守点検結果は、早急な改善事項、指摘事項はなかったが、機械・電気部品のメーカー保証年数が経過したものが多々あり、中大規模のオーバーホール等に対策が必要である。

舞台備品については随時、職員による点検を行い、軽微な故障は舞職員が部品を調達して補修を行なうなどして維持管理に努めた。

八雲立つ風土記の丘

■平成25年度指定管理業務総括～

第2期の指定管理4年目として

展示活動、普及事業など業務全体の改善・向上に取り組み、観光案内施設、史跡めぐりの拠点施設としての役割も求められることを想定し、利用者サービスの強化を図った。学校や県外からの見学者へ風土記の丘地内等の史跡案内に加え、無料自転車の貸し出し、書籍・グッズも品ぞろえを増やし販売・提供を行った。

管理運営としては、風土記の丘展示学習館及びガイダンス山代の郷の適切な施設管理と地内9箇所に点在する史跡の監視点検、除草・樹木の管理等を、一部は地元自治会等の協力を得ながら適切に行った。また、古代家屋の燻蒸作業を行うとともに、約40年ぶりに竪穴式住居の萱の取り替えを行い、管理地内の竹木の伐採や遺跡等の高木の剪定をし、環境整備を図った。

地域との連携として、松南ブロック公民館と連携しての体験学習や大草地区において住民と共に「国府まつり」を開催することができた。また、「出雲まほろばガイドの会」「NPO法人古志原ボランティア」の協力を得て、各種の普及事業を協働して実施することができ、今後も継続して連携できるよう取り組みたい。

1. 文化事業

1-1 指定管理事業

① 魅力ある展示事業～歴史文化の調査研究と情報発信～

- 常設展テーマを「古代出雲の中心地 意宇」として地内で出土した考古資料等を定期的に入れ替えしながら展示した。周辺の史跡めぐりの拠点として、主要な遺跡の紹介展示を維持することで県外からの来館者にもわかりやすく、また、一部展示替えを行うことでリピートの来館者にも配慮し「いつ来ても何度来ても楽しい」展示を行った。
- 予算としては、年1回の企画展予算と常設展維持費用のみであるが、学芸員自らが梱包・輸送・展示を行うことでミニ企画展、スポット展等の低予算ながらも話題性のある企画を開催できた。「あの世をのぞく」は、夏休みの親子づれをターゲットに、お化け屋敷をイメージさせるような雰囲気にし、埋葬に関わるものを展示した。特にメインとなる古代人の遺骨や遺骨が入った石棺は子供たちに高い関心を得た。年末から正月開館をはさんで、新春に実施した、新春ミニ企画「組曲 馬～干支にちなんで～」は、干支である馬をテーマにした写真・馬具・制服などをアラカルト的に展示。マスコミからも取材が多く、県内外の来館者に好評であった。また、「特集展 平所遺跡と石屋古墳出土埴輪のすべて」「保管資料展 遺物たちのめざめ」「25年度風土記の丘地内発掘出土

調査速報展」を開催した。以前全国的な話題となった石屋古墳の埴輪の公開、収蔵庫からあまり出したことがない遺物を展示、など、多数のマスコミ掲載、県内外からの来館者があった。

- 企画展「山城の世紀—発掘された島根の城—」では、今までとは異なる中世をターゲットにし、新たな層の歴史ファンの獲得を図った。企画展に併せて当館の主任学芸員が編集した「出雲の山城」を発刊し、山城ブームも相まって、地元新聞社に大々的に取り上げられ、県内外から注目を集めた。
- 無料入館できるフロアにおいてロビー展を行い、歴史資料展示を原則とした展示室に対し、多様なテーマで展示を行った。切り絵作品を展示した「京都発母のふるさと松江市へ—切り絵作家シャンドリーの世界」、出雲地方に古代から現代まで祀られている巨岩・巨石を紹介した「出雲の石神さまⅡ～古代の人々がみた自然の神々～」(共催：荒神谷博物館)、島根半島に古くから伝わる信仰習俗である四十二浦めぐりをイラストやパネルで紹介した「パネル展 原美代子 私の四十二浦」を開催して話題となり、歴史への関心喚起に加えて、事業をきっかけに市民の交流・交歓の機会も提供できた。
- ガイダンス山代の郷においても、入場無料のロビー展を行い、施設の広報と集客に努めた。「ふるさとの民具」は、地元住民寄贈の民具を活用した展示事業であるが、開始以来、地元小学校から総合学習として見学・体験希望があり連携を続けている。「ふるさとの民具 水との暮らし」「出雲の山城～縄張りを探る～」山代町の民俗祭祀」など地域文化財の記録・紹介を行い、地域住民からも好評を得ている。

②青少年等の学習及び交流の場の提供

交流・交歓の場事業

毎年の恒例行事として定着したイベントである「こどもまつり」、「国府まつり」、「月の宴」を開催し、地元住人との交流、風土記の丘活動の普及、地域の活性化に努めた。「植物園教室」では、全国唯一の風土記植物園の知名度アップ、活性化に大きな効果があった。

普及・体験事業

企画展・ロビー展関連事業として展示見学と合わせた体験・見学を行った。風土記の丘周辺の史跡を実際に巡る「茶臼山登山」、「史跡見学会」、「文化財散歩」は年々参加者の増す人気イベントとなっている。「土器づくり」、「土器野焼き」、「七草かゆ」など、年間で伝統文化を学ぶ講座と古代の体験学習を親子や小中学生を対象に開催し、好評を得た。イベントの開催に際しては、地域住人にも指導ボランティアとして参加いただき、地域の高齢者と子供たちのふれあいの場ともなっている。

その他

風土記の丘教室を毎月1回開催した。本年は、企画展に関連するテーマを主体とした。展示学習館の展示説明や地内の史跡案内については、多数の学校や団体が訪れる中、ボランティアガイドと協働してきめ細かな対応を行い、高い評価を受けている。また、館内見学者対応に加え、ガイド養成講座等への講演依頼が増加したが、積極的に学芸員が対応した。館報「八雲立つ風土記の丘」では研究の成果発表等を掲載し、年3回発行した。館報とは別に新たに「ニュースレター(Deer News)」を年3回発行。イベント情報を中心とした記事を掲載し、風土記の丘の情報発信した。

1-2 自主事業

ネットワーク育成事業

自主事業としては、引き続き財団事業である「展示施設ネットワーク事業」として「しまねミュージアム協議会」の事務局として活動すると共に、県からの委託事業としてミュージアムネットワーク構築事業「バーチャルミュージアム制作業務」を実施した。

インターンシップ事業

体験学習、職場研修、インターンシップなど積極的な受け入れを行った。